

[水稲部門 令和2年度 指導参考資料]

事項名	水稲高密度播種苗栽培における葉いもち及びイネミズゾウムシに対する側条施薬による防除法		
ねらい	水稲高密度播種苗栽培は育苗箱の使用枚数を削減できる技術だが、従来の箱施用（50g/箱）では10a当たりの薬量も減少するため、防除効果が低下する懸念があった。そこで、移植時に側条施薬する防除方法を検討した結果、葉いもち及びイネミズゾウムシに対して、安定した効果が認められたので、参考に供する。		
指導参考内容	<ol style="list-style-type: none"> 1 高密度播種苗栽培における育苗箱施用の葉いもちに対する防除効果 育苗箱施用は、高密度播種苗において葉いもちの発生が多い場合防除効果が劣る傾向が見られた。高密度播種苗栽培では育苗箱施用を避ける。（図1） 2 側条施薬による防除法 高密度播種苗栽培において、田植機に装着する移植同時側条施薬機を用い、薬剤を10a当たり1kg側条施薬することで、葉いもち及びイネミズゾウムシの防除ができる。（図1、表1） 3 移植同時側条施薬機は、事前に薬剤の吐出量を確認、調整してから使用する。 		
期待される効果	<ol style="list-style-type: none"> 1 薬剤を移植同時に施薬することで、省力化が期待できる。 2 常に一定量の薬剤を必要な分だけ施用することができ、効果の安定化及び低コスト化が期待できる。 		
利用上の注意事項	<ol style="list-style-type: none"> 1 本資料は令和元年11月19日現在の農薬登録内容に基づいて作成した。 2 農薬を使用する場合は、必ず最新の農薬登録内容を確認して使用者の責任のもとに使用すること。 「農薬情報」(http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/) 「農薬登録情報提供システム」(http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm) また、短期暴露評価の導入により使用方法が変更された農薬は、登録内容の変更前であっても、変更後の使用方法で使用する。 3 播種量240～250g/箱（乾籾）の高密度播種苗で実施した試験結果である。 4 プロベナゾール剤による葉いもちに対する試験結果及びクロラントラニリプロール剤によるイネミズゾウムシに対する試験結果である。 5 イネミズゾウムシ成虫に対する防除効果は低い。 		
問い合わせ先（電話番号）	農林総合研究所 病虫部 (0172-52-4314)	対象地域 及び経営体	県下全域の稲作 経営体
発表文献等	平成29～令和元年度 農林総合研究所試験成績概要集 北日本病害虫研究会報 第70号		

【根拠となった主要な試験結果】

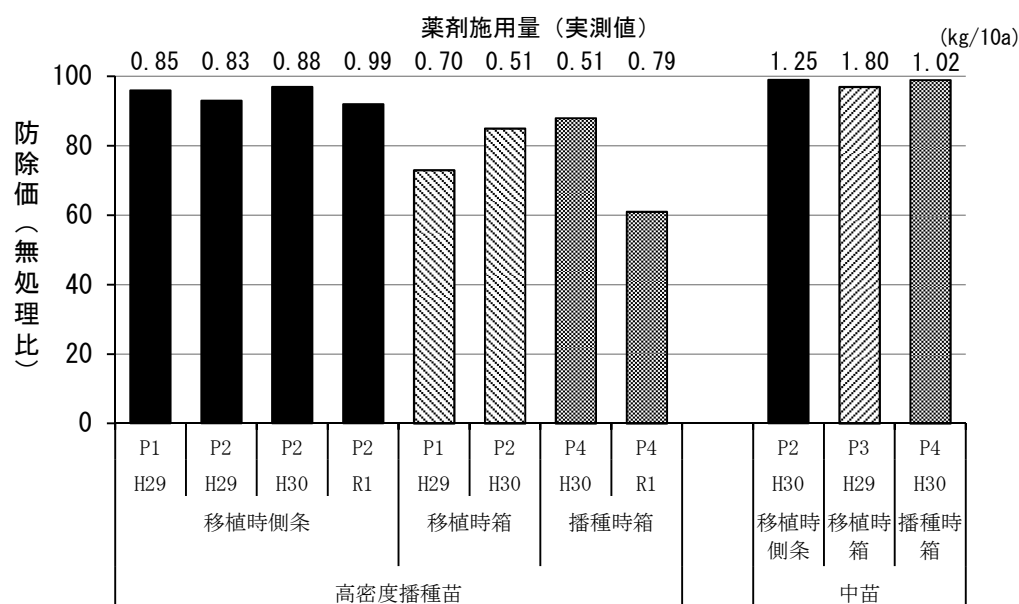


図1 プロベナゾール剤による葉いもちに対する防除効果 (平成29～令和元年 青森農林総研)

- (注) 1 品種「ゆめあかり」(いもち病抵抗性は葉：中、穂：やや弱)
 2 播種量 乾籾240g/箱(H29)、250g/箱(H30、R1)
 3 施肥(kg/10a) N11+3(H29、H30)、N11+4(R1)
 4 供試薬剤 P1：シアントラニプロロール・プロベナゾール粒剤(Dr.オリゼパディート粒剤)、P2：クロラントラニプロロール・プロベナゾール粒剤(Dr.オリゼフェルテラ粒剤)、P3：フィプロニル・プロベナゾール粒剤(Dr.オリゼプリンス粒剤6)、P4：フィプロニル・プロベナゾール粒剤(ファーストオリゼプリンス粒剤6)
 5 施薬方法 移植時側条施用(設定1kg/10a、H29はK社製試作機、H30、R1はK社製SSY6を使用)、移植時箱施用(50g/箱)、播種時箱施用(播種時覆土前、50g/箱)
 6 10a当たり使用箱枚数 H29：高密度播種苗14枚、中苗36枚、H30：高密度播種苗10.2枚、中苗20.4枚、R1：高密度播種苗15.7枚
 7 無処理区の発生状況 H29：中発生、H30：少発生、R1：中発生

表1 クロラントラニプロロール剤によるイネミズゾウムシに対する防除効果

(令和元年 青森農林総研)

供試薬剤名	実薬剤 施用量 (kg/10a)	区制	6/8		6/10		6/12		6/19		6/26		7/3		7/10	
			成虫数 (頭)	食害度	成虫数 (頭)	食害度	成虫数 (頭)	食害度	成虫数 (頭)	食害度	成虫数 (頭)	食害度	成虫数 (頭)	食害度	成虫数 (頭)	食害度
クロラントラニプロロール・ プロベナゾール粒剤 (Dr.オリゼフェルテラ粒剤)	0.99	I	19	30	13	38	15	43	9	45	9	42	0	28	2	26
		II	13	31	13	45	17	42	11	45	3	34	2	25	0	25
		平均	16.0	30.5	13.0	41.5	16.0	42.5	10.0	45.0	6.0	38.0	1.0	26.5	2.0	25.5
		指数		89.7		88.3		85.9		84.9		86.4		82.8		102
無処理	-	I	18	34	21	51	18	57	17	63	8	55	9	35	0	25
		II	9	34	14	43	13	42	12	43	5	33	3	29	0	25
		平均	14.0	34.0	17.5	47.0	15.5	49.5	14.5	53.0	6.5	44.0	6.0	32.0	0.0	25.0
		指数		100		100		100		100		100		100		100

供試薬剤名	実薬剤 施用量 (kg/10a)	区制	7/15					同左 指数	薬害
			若齢	中齢	老齢	土繭	合計		
クロラントラニプロロール・ プロベナゾール粒剤 (Dr.オリゼフェルテラ粒剤)	0.99	I	0	0	1	0	1	1.5	-
		II	0	0	0	0	0		
		平均	0	0	0.5	0	0.5		
無処理	-	I	2	7	19	0	28	100	
		II	11	13	14	0	38		
		平均	6.5	10	16.5	0	33		

(注) 播種：5月1日(乾籾250g/箱)、移植：5月23日、側条施薬(設定1kg/10a K社製SSY6を使用)
 使用箱枚数：約15.7枚/10a、放虫：畦畔シートで0.8×1.5mを囲い、上部に網を掛けた25株に、成虫25頭を放飼。
 幼虫数は各区10株の根部に寄生している虫数を調査。